修士論文（要旨）
2020 年 7 月

独学者を対象とした日本語の意味づけの変化

指導　青山文啓　教授
言語教育研究科
日本語教育専攻
217J3010
李　明キン

Master's Thesis (Abstract)
July 2020

Changes in the Scope of Meaning in Japanese of ' Self－educator '

Thesis Supervisor:Fumihiro Aoyama
Graduate School of Language Education
Master's Program in Japanese Language Education
217J3010
Mingxin Li

目次

第一章　はじめに

1.1　研究背景 1

1.2　研究目的 4

第二章　用語の定義

2.1　独学 6

2.2　独学者 6

2.3　動機づけ 6

第三章　先行研究

3.1　動機づけについて 7

3.2　Shoaib＆Dörnyei 動機構成概念の７つの局面 8

3.3　言語学習における「消費」と「投資」 9

3.4　独学について 10

3.5　言語学習ヒストリー(LLHs) 14

第四章　調査概要

4.1　調査方法 15

4.2　調査対象 16

第五章　LLHs の記述と分析

5.1　A の場合 17

5.2　B の場合 21

5.3　C の場合 24

5.4　学習動機と日本語の意味づけ 28

第六章　考察

6.1　日本語の意味づけの変化 29

6.2　日本語の意味づけの変化の要因 30

6.3　独学者の日本語文法問題 34

6.4　その他 35

第七章　まとめと今後の課題

7.1　まとめ 36
7.2　今後の課題 37

参考文献
巻末資料

情報通信技術の発達とその急速な普及により、インターネット上で、多様な情報が流通している。伝統的な学習スタイル、つまり、教室において、教師あるいは教科書から一方的に、知識を与える受動的な学習スタイルより、外国語学習者は自分が興味を持っている情報を手に入れるために自ら外国語を学習し、必要な情報を探す。近年、日本語学習者は文化的背景が多元化する中、さまざまな学習ニーズに合わせ、多様な学習スタイルが生まれた。その中に、インターネット上の通信情報サービスのような学習リソースを利用し、日本語を独学する日本語学習者がいる。このような学習者を「独学者」と呼ぶ。

筆者自身も日本語独学者の一員である。来日前に知り合った日本語学習者も全員独学者である。日本語独学者の一員だからこそ、独学者の実態を体験しただけでなく、独学者の抱える問題も分かる。独学者の多くは日本語能力試験などの試験を受けたことがなく、日本語が上達したいとも思っていない。日本語が上達する独学者は少なく、日本に留学までする人は数えるほどしかいない。しかし、これから筆者のような日本語独学者が増えるだろう、彼らは来日後、どのような悩みを抱えるのか、どのように独学した日本語を活用するのかなどについて探るため、この研究を行う。

本研究では、日本語を独学し始め、強い信念を持って留学にまで辿り着いた中国人留学生を対象に、言語学習ヒストリー(LLHs)を用い、彼らの日本語学習の動機、動機づけの変化、日本語は彼らにとってどのような意味を持つか、を調査する。また、各学習段階における彼らの日本語への意味づけを明らかにする。さらに、日本語の意味づけの変化に影響する要因を考察する。リサーチクエスチョン(以降は RQs)は主に以下の 3 つである。

RQs (1)　独学者が日本語学習を始めるきっかけと継続の理由は何か
RQs (2)　独学者にとって日本語の意味づけは、学習段階によってどのように変化したか
RQs (3)　その変化を起こした理由は何か

研究課題の解明のために、次の 5 つに関わる先行研究を概観・考察する。「独学」「動機づけ」「Shoaib＆Dörnyei 動機構成概念の 7 つの局面」「言語学習における「消費」と「投資」」「言語学習ヒストリー(Language Learning Histories 以降 LLHs)」。

本研究の調査対象は日本語を独学し始め、日本に留学している 3 人の中国人留学生である。3 人は日本語の学習経歴は同じで、日本語を独学し始めた後に、日本語学校に通い、大学・大学院へ進学した。

LLHs の調査は WeChat を使って行った。まず、データ内容の適切さを保つため、事前に短いインタビューをして内容を把握した上で、それまでの日本語学習について LLHs を語ってもらった。インタビューの会話データを文字化し、「動機構成概念の 7 つの局面」を援用し、学習段階での学習動機と日本語の意味づけを分析、考察した。

分析の結果、日本語の意味づけは留学時の興味、余暇活動ための「消費」から実利を求めるための「投資」へと変化したこと、また調査対象者らは「日本語学習者」から「日本語使用者」に変化したことが分かった。その変化は動機づけの変化による。また、独学者に最も動機づけの変化を起こす動機構成概念の局面は、「L2 接触と環境文脈に関係した局面」「情意的・統合的局面」「道具的・実用的局面」「自己概念に関係した局面」「目標に関係した局面」であり、内的要因が動機づけや日本語の意味づけに影響していることが分かった。さらに、独学者には外

的要因の影響が少ないことも分かった。つまり、日本語独学者に影響しているものとしては、独学者自身の内的要因が大きい。

この結果から、独学者の日本語学習にとっての日本語の意味づけの変化について、以下のようにまとめることができる。

(1)　学習の継続は目標達成への強い信念を持つことが大きい
(2)　日本留学経験に与える言語学習への「投資」意欲
(3)　日本語文法上の問題
(4)　外的及び内的要因

本研究で調査対象とした独学者たちの日本語の意味づけは、日本への興味や余暇活動、娯楽のための「消費」から、日本語学習によって日本語を身に付け、それを使って何かをすること、つまり実利を求める「投資」に変わり、その後ネイティブのように日本語を話せる日本語使用者に辿り着いた。本研究の結果を見る限り、独学者の日本語への意味づけは「消費」から「投資」へ移行する傾向が見られる。

その変化の要因として、学習者の情意面からの動機づけがあり、彼ら自身の学習意欲が強くなったということがある。それだけではなく、自身を取り巻く環境から影響を受け、道具的・実用的面から動機づけが深まったことがわかった。このようにして独学者としての学習意欲が徐々に増していったと言える。

学習者は多様で、それぞれのニーズも異なる。特に独学者たちは学習の自主性と自由度を最大限に有しているため、これまでの教室内学習者を対象にした研究で見られたものとは異なる特徴が見られることが予想される。本研究により、独学者なりの学習方法、特徴などが確かに存在していることもわかった。このような学習方法や学習行動などの研究が、教室内学習者の問題解決へとつながることも期待できる。

参考文献

池田雅美(2016)「独学可能な時代―多様化する日本語学習歴と授業活動への影響」『CAJLE 2016　Proceedings』pp.70‐79

池田朋子(2017)「日本語独習者の学習動機とアイデンティティ形成―ライフストーリー調査をもとに―」『Journal　CAJLE』　Vol.18、pp.21‐42

伊田勝憲・乾真希子(2011)「学習意欲研究のおける自律性の位置づけ：内発的動機づけの批判的検討を通して」『釧路論集：北海道教育大学釧路校研究紀要』第 43 号、pp.7‐14

市川伸一(1995)「学習と教育の心理学」岩波書店

岩本尚希(2013)「外国語学習者の学習継続要因に関する一考察 ： 言語学習ヒストリーから」『桜美林言語教育論叢』6、pp.29‐43

王明潔・大浦洋子(2010)「中国人留学生の学習意欲の変化に影響を及ぼす要因」　『九州情報大学研究論集』12 巻、pp.13‐19

大西由美(2014)「日本語学習者の動機づけに関する縦断的研究：日本語接触機会が少ない環境の学習者を対象に」　北海道大学国際広報メディア・観光学院国際広報メディア専攻博士論文（未発刊）

岡崎正道(1993)「ドラマ・漫画による日本語教育」『Artes liberals』　第 53 号、pp.39-53

岡葉子(2017)「日本語教育学における「学習動機」の概念について―motivation の訳語をめぐる問題―」　『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』43、pp.19‐32

甲斐晶子(2018)「学習者の興味に適応した言語使用場面の提示が学習意欲に及ぼす影響：独学者が日本語オープン教育リソースに関連性を見出すための支援」『桜美林論考、言語文化研究』(9) pp.33‐42

河合靖(1999)「外国語自律学習研究の 3 要素：動機づけ、学習スタイル、学習ストラテジー」『言語文化部紀要』37、pp.68‐85

久保田竜子・瀬尾匡輝・鬼頭夕佳・佐野香織・山口悠希子・米本和弘(2012)「余暇活動と消費としての日本語学習―カナダ・フランス・ポーランド・香港における事例をもとに」『第九回国際日本語教育・日本研究シンポジウム大会論文集予稿集』pp.69‐85 ココ出版

桜井茂男(1990)「内発的動機づけのメカニズム　自己評価的動機づけモデルの実証的研究」風間書房 1990

佐藤梓(2019)「外国語学習環境における日本語学習者の動機づけ：メキシコの学習者を対象とした分析から」北海道大学．博士（学術）甲第 13629 号

倉八順子(1991)「外国語学習における情意要因についての考察」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』33 号、pp.17-25

倉八順子(1994)「第二言語習得における個人差」『教育心理学研究』42‐2、pp.110‐122

来嶋洋美・鈴木庸子(2003)「独習による日本語学習の支援―その方策と ARCS 動機づけモデルによる評価―」『日本教育工学会論文誌／日本教育工学雑誌』27（3)、pp.347‐356

谷口美穂(2012)「日本語学習者の視聴覚メディア使用―インタビューからみえた教室外における自律学習の実態―」『言語教育研究』第 2 号、pp.65‐74

得丸智子(2018)「日本語独習者の研究～アニメ視聴から始まった日本語学習」開智国際大学紀要第 18 号

得丸智子(2020)「アプリを活用した単語学習を中心とする日本語独習～TAE によるインタビ

ュー分析」開智国際大学紀要第 19 号
中山亜紀子(2007)「韓国人留学生のライフストーリーから見た日本人学生との社会的ネットワークの特徴：「自分らしさ」という視点から」『阪大日本語研究』19. pp.97 - 127
中山亜紀子(2016)「「日本語を話す私」と自分らしさ：韓国人留学生のライフストーリー」ココ出版社
西山潤(2018)「主体的・対話的で深い学ぶと独学の関係性に関する教育方法学的考察−現代における独学の意義の再検討−−」『地域連携教育研究＝Journal of Education and Research for Regional Alliances(2018)』2、pp.55-67
原田登美(2008)「留学経験は学習動機にいかに関わっているか：「自己決定理論」に拠る「甲南大学 Year in Japan プログラム留学生」の留学と日本語学習の動機の変化」『言語と文化』2008 年 12 巻、pp.151-171
道端輝子(2014)「学習者が日本語を意味づける過程から見える日本語教育のあり方―「日本語グラフ」とインタビューによる考察より―」早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文 2014 年 3 月
吉田国子(2009)「語学学習における動機づけに関する一考察」『武蔵工業大学環境情報学部紀要』第 10 号
山本晃彦(2014)「日本語学習者の学習意欲の変化とその要因 ーインドネシアにおける渡日前日本語研修の事例よりー」拓殖大学大学院 言語教育研究科 言語教育学専攻 博士論文
梁淑梅(2010)「论外语自主学习模式及能力培养」『太原师范学院学报』 第 9 巻 第 5 期 2010 年 9 月
Murphey,T.Chen,J. &Chen,L.C.(2004)「Learners' constructions of identities and imagined communities. Learner's Stories」 Cambridge University Press. pp.83-100
Norton・Peirce,B(1995)「Social identity,investment,and language learning」TESOL Quarterly 29(1),pp.9-31
Shoaib, A. & Dörnyei, Z.(2004)「Affect in lifelong learning: Exploring L2 motivation as a dynamic process. In P. Benson, & D. Nunan (Eds.), Learners' Stories: Difference and diversity in language learning. 」Cambridge: Cambridge University Press. pp.22-41
国際交流基金「海外日本語教育期間調査」https://www.jpf.go. jp/j/project/jap anese/survey/result/（最後アクセス：2019 年 12 月 13 日）
文部科学省「外国人留学生在籍状況調査」https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1412692.htm（最後アクセス：2019 年 12 月 13 日）